

## 知里幸恵と金子みすゞ

風花 小町

トゥワトゥワト・…トゥワトゥワト・…と信じられないくらいに平淡にくり返される折り返し。お話により色々な言葉が合の手のようにリズムカルに入ってくる。言葉と抑揚が作り出す不思議な世界だ。

中本ムツ子さんがうたう、アイヌ語による神謡集を聞いていると、止まった時の中、大自然の営みに抱かれた人間のくらしが、目の前に浮かんでくる。知里幸恵はこうした滅びゆくアイヌ最後の世代の人で、まったく日本化(和風化)された世代との間に立って、橋渡しの役割を担った人だ。

知里幸恵訳『アイヌ神謡集』の平易で美しい日本語の背後には、彼女の持つ温かい視点が感じられ、それと共に序文にはしっかりと彼女の主張がこめられている。20歳前の若い女性が的確に、自ら属するアイヌ民族の滅びゆく現実を切々と訴えている。このことが痛いほどに伝わってくる。いったいこれほどの文章を残した彼女はどのような人であったろうか。

私は以前にもこういう思いを抱いたことがある。金子みすゞの童謡と出会った時である。この時も、今、現実に見えていないもの、虐げられているものに心を向けて、それを謡にしているみすゞ自身のことがとても気になった。

少し調べてみると、二人には意外に共通点が多い。

二人は共に1903年(明治36年)の生まれで、尋常小学校を1914年(大正3年)に卒業後、高等女学校(幸恵は女子職業学校)に学び、17歳で卒業している。同じ時代の空気を吸った、向学心の強い女性だったのである。

幸恵は19歳で、みすゞは26歳で、二人とも若くして没している。北海道(登別と旭川)と山口県(日本海側の仙崎という漁師町)という自然豊かな地で、苦勞の多い青春時代を送っている。幸恵は持病の心臓病とアイヌ出身ゆえの被差別と静かに闘い、一方みすゞは肉親との死別や生き別れを幼くして体験し、複雑な家庭環境の中、本の世界に没頭していく。

そして不思議なことに西條八十の童謡と、二人共に縁があるのである。大正デモクラシーといわれた時代、童謡は若い女性達が思いの丈を述べる手段として盛んにうたわれたらしい。幸恵は東京で、西條八十も活躍した雑誌『童話』を買って愛読していたようだし、みすゞは漁師町の本屋で店番をしながら『童話』に自作の童謡を投稿し、20歳の頃、西條八十に認められ絶賛される。このことに非常に勇気づけられ、没する昭和4年までに90編を発表し続けたという。(彼女の作品は全部で500編以上)

知里幸恵はアイヌの血をひく何代も続く登別の旧家に生まれ、登別川や広大な太平洋

を近くに、当時としては日本風でハイカラな両親のもと幼い頃を過ごしている。小学校入学以後は、アイヌの文化や生活スタイルを維持しながらキリスト教の伝導生活をする母の姉・金成マツと、幸恵の祖母に当たるモナシノウク(ユーカラの伝承者)と三人で旭川の近文コタン村で暮らすことになる。競争原理を持って内地から入って来た人達からの蔑視のまなざしに耐えて貧しい中を生き抜いてきた幸恵は、大正7年女学校2年生(16歳)の夏、36歳の新進気鋭のアイヌ研究者、金田一京助と出会う。金田一からユーカラが貴重な人類の文化遺産であることを教えられ、また幸恵自身の持つ日本語能力を買われ大いに期待される。幸恵は「がぜん」全生涯をあげて祖先が残してくれたユーカラの研究に身を捧げる「決意をし、20歳の春、東京の金田一のもとに下宿し、3ヶ月でこの本を成すのである。

みすゞと西條八十と同様、このふたりの間にも信頼しあえる強い師弟関係があったことは確かだ。

今から80～90年も前の大正時代に、20歳そここの女性がこれほどまでにバランスのとれた考え方が出来、ことの真理を見抜き、そして現代の我々に通じるメッセージを残しているのだ。苦境に育った人間故にこそ持つことを許される慈悲のような大きな心もある。まっすぐ前を向いて意志を貫こうとする情熱的な強い志もある。このような女性を輩出した、反骨の精神が旺盛だった大正という時代に私は少しロマンを感じている。(2003.9.17)

#### 参 考 文 献

- |                        |       |         |
|------------------------|-------|---------|
| 『アイヌ神謡集』 知里幸恵編訳        | 岩波文庫  | 1978年発行 |
| 『知里真志保の生涯』 藤本英夫著       | 新潮選書  | 昭和57年   |
| 『父京助を語る』 金田一春彦著        | 教育出版  | 昭和52年   |
| 『アイヌ神謡集を読みとく』 片山龍峯     | 草風館   | 2003年   |
| CD「アイヌ神謡集」をうたう うた中本ムツ子 | 草風館   | 2003年   |
| 『金子みすゞ童謡集』 矢崎節夫編       | ハルキ文庫 | 1998年   |